



野作雜記譯說

五

洋学文庫
文庫 8
C 273
4





東北鞆韃諸国圖誌野作雜記譯說卷之五



和彙 譯司 長壽 馬場 貞由 奉

命

附譯

左ノ蝦夷地方略図ハ原本ノ首ニ総載セル圖中
ヨリ唯蝦夷地方ニ係ル者ノミヲ抄出シ模寫ス
其圖形最誤ル者蚕不少西人已ニ如斯諸地ヲ私

右スル者ヲ知テ本編ヲ讀ムノ便トセントモ也

蝦夷地方略圖

貞由 左ニ抄載スル 蝦夷海上遠望諸因中ニ傍
記シタル方位ヲ以テ右ノ略因ト相照ラレコ
レヲ考察スルニ左ノ第一ノ圖ヨリ第三ノ因
マテハ蝦夷ノ南面東面及ヒ「クナシリ」ノ南面
ノ地図ナリ第四ノ因ハ「クナシリ」ノ南面ノ地
ナリ第五ハ「カラフト」ノ内海ニテ西稱シテ「シ
ント・ヤアコブス」格ニ「シント・ヤアコブス」ハ右方ニ「イニシ」岬ト「アニ
コ」岬トノトイフ海灣ヲナス処ヨリ「カラフト
間」ナリ

東南面ノ海岸ヲ遠望シタル図ナリ第六ハク
ナレリノ南面及東面ノ地ナリ第七ハクナレ
リノ西面及蝦夷ノ北面ナリ第八ハクナレリ
ノ西北面蝦夷ノウナベツ山ノ北面及ヒ其地
方總テ北面ノ地ヲ畫シタルモノナリ

蝦夷地方海上可遠望諸圖

共八図

第

分之處處至作因

右八圖皆海上ヨリ遠望シ其船ノ所在ニ因リ
出地ノ高度ニ從テ其望ム所ヲ異ニス同處ト
イヘ氏其方位遠景各差別ヲナスコレ西洋航
海家ノ常トスル所トイヘ氏能務メタリトイ
フヘシ我亦コレニ本ヒテコレヲ訂正セバ必
ス其眞ヲ得ベシ

四面環海船路中毎々如此圖ヲ製スルモノ極
テ多シ彼シ其諸圖編ヲ以テ海鏡ゼイ、ス、ビト

名ケルモノ數十部アリコレ亦其一端ナリ

同書中ノ別條本編ノ諸説ニ參考スベキ
モノヲ得タリ因テコレヲ左ニ附譯ス

增譯

同書韃靼紀事ノ中第百七十七葉ニ曰「アムル」

河異名ノ兩岸ハ總テ樹木繁茂シ高山処々ニ在

リテ其河水ハ大海ニ注ク其河口ニ一大島アリ

按ニ「サハリヤ」ニ其島中ノ土民「キリヤキ」梅ニ黒

ヲ作スニ似タリ北ニ在人ニ似タリ其居宅ノ造建亦然リ夏衣ハ

魚皮冬衣ハ大皮ヲ以テ製シタルヲ着ス每家犬

五六匹ヲ飼フ冬ノ中ハ海水總テ凍ル即其犬ヲ
雪車ニ繫キテ氷上ヲ縦横ニ走ラシメテ運送ノ
用ヲ和ス夏ノ中氷ノ解ケタル間ハ其海上ニ小
舟ヲ浮メテ魚獵ヲナスナリ食物ハ大熊魚美等
ヲ用ユ又恒ニ熊ヲ飼置クモノアリ 按ニ全ク我
リ哈喇和土考ヲ得見
テコレヲ知ルベシ

○第九十葉ニ曰「アムル」ノ河口ヨリ南北ノ沿海總
テ水中ニ蘆影レク生ス因テ渡海ニ甚不便ナリ

マ、ヲ以テ此邊ヲ按檢スルコト至テ難シトス但
夏月漸ク氷解テ後晴天快霽ノ日ヲ候テ小舟ヲ
浮タルハ必ス通船スベカラサルニアラス 梅ニ
本編

亦蘆ノ
説アリ

第九十六葉ニ曰支那ト魯西亜ト戦争ノ本末紀
事ニ云ク「アムル」ノ河口ニ一嶋アリ「キリヤツ」
ト名リ 梅ニ「キリヤツ」ハ黑竜江
口北邊ノ一小地名ナリ 土民多ク住ス故
寫ト河口トノ間ナル海底ニハ蘆竹多クアリ故

ニコノ 鸞ノ 西方ニハ 近ツクベカラス 然レハ 其
一邊ニモ 按ニ其東方ヲ云カ 尚以物海中ニ 頗ル多シトイ
ハ 氏舟ハ 寄ヌベシトイヘリ 但其支那ト 魯西亜
トノ 戦争トイフハ 即一千六百八十三年 日本天
癸亥 清康熙 和三年 ノ 夏 支那ヨリ 軍艦五百六十艘 兵卒
一萬五千人 及其他 教多ノ 軍器ヲ 裝載シ ト
ラ 河 按ニ アムル 河 注ク 川ノ ヨリ シンカル 河
按ニ 因中 アムル 河 注ク 一 大 川 ニ 致シソレヨリ
シルカ 河 アリ 恐クハ コレ 字 ニ 致シソレヨリ

アムル 江 星 竜 ニ 入りテ 即其河岸ナル 新城ニ 達ス
自注ニ 曰 坎城ヲ アルバ シ ト イ フ ト 按 ス ル
ニ アル バ シ ニ 一 名 マ リ サ レ 即 清 人 音 譯 ス ル 所 ノ
雅克薩城 坎 城 内 ハ 勿 論 其 餘 處 々 ニ 陣 ヲ 張 テ 遠
ク アムル 河 邊 ニ 在 テ 既 ニ 住 居 ヲ ナ レ タ ル 魯 西
亜人共ヲ 追ヒ 退ケントス 然ルニ 魯西亜人 劇テ
コレヲ 防ントシテ 卒ニ 出テ 向フモノ 總テ 七十
人アリト 而ルヲ 支那人 皆コレヲ 虜ニス 其中十
人ハ 逃ケ 走テ 速ニ 其旨ヲ 本国ニ 告リコトニ 於

テ魯西垂ヨリモ亦「ルツガ」河自註ニ日コノ河
 流レテ遂ニ川ム韃ノ中ニ在テ漸ク
 此「理」竜ニ入ルトノ岸ナル「子ルツシンスコイ」按
 詳本元裕ニノ卷ニ註ス即城争乱千六百八十九年
 清康熙ニ十八年己巳二和議ヲ講シ遂ニコノ「子ル
 地ニ於テ和睦ス」ノ城ニ兵卒二千人ヲ出シテコ
 レヲ防カシメタリトナリ

按ニコノ事ノ詳説ハ他ノ書中及清朝諸書ニ
 モ見ヘタリ

東北韃靼諸國因誌野作雜記 附譯終

補譯

左ニ譯出スルモノハ西哲「ヨハン」エグ子ルトノ
 ヘル者ノ撰スル「¹」オカラ「¹」イ「載ト譯ス」ト云
 フ書ノ系四系五卷ニ載セタルヲ抄出セルナリ
 即其書ハ曆教一千七百六十九年日本安永ニ刊
 行シタルモノナリ是迄ノ和蘭將來輿地書中ニ
 於テ尤精確ニシテ且毎篇新修校正ヲナセルモ
 ノナリ故ニ編中各篇載スル所ノモノ皆共ニ信

ヲ取ルベキモノ多シ即其書野作^{正ソ}地ノ事ヲ録ス
ルノ條ヲ抄レテコハニ補譯スルヲ左ノ如レコ
レ亦本編ト參考スルノ一助ニ供ス但其說ク所
聊傳聞ノ失ナキニアラス然レモ輿地集說中我
地方ノ一ヲ載スルカ如キモノモコノ書ニ如ク
モノナカルヘシ尤當今我 邦將未ノ西書中
地理ノ一ニ至リテハ恐クハ其書ノ上ニ出ルモ
ノナレ兼テ尚其書中第五卷ノ首ニ載スルノ

本邦及隣界ノ圖在畧寫ス宜ク因本說^{ト併}見ルベシ
輿地^カ統^カ載^ヒ略^ト圖

○サカリイニアンガハダ多五卷ニ百五十
凡葉ニ載スル所

按ニ韃靼語薩哈連口峰ノ義ナリ即チ滿人所

呼ナリ峯ハ崑崙山ノ突尖シタルノ状ヲ以テ名

クト見ユ是必我所呼哈刺弗カラフト多ナリ

此崑アムール一名サカリイニウラ按ニウラハ

即薩哈連江清人所ノ海ニ入ル其正韃語河ナリ向ニ在リ因

謂黒竜江コレナリテイスレデボウセト云フ按ニ

テ拂郎察人ハ名テイスレデボウセト云フ按ニ

レハ拂郎察語崑ホウロハ口ト云フ義ナリ其命

名ノ由ヲ考フルニ此崑全ク異竜江ノ江口ニ對

ノ所在スルニ由テ魯西亞人千七百二十八年

名ヲ命スルト見ユ日本享保十三年

戊申清雍正六年ニ此崑ニ於テ初テ眞珠母ノ獵

ヲ創業シタリ然レハ此崑固ヨリ支那韃靼ニ屬

スルモノナルニ因テ支那人コレヲ退ケテ禁止

セリコノ崑中ニハ大茴香ノ産多ク又許多ノ狐

ヲ獵スベシ

按ニ此崑ニ於テ云云ハ即河ニシテ曾テ黒竜

江ニテ眞珠ヲ採リシトナルベシ其說諸書ニ

總稱ス即「マトマイ」モ其諸島中ノ最大ナルモノナ
リ日本ヨリコレヲ治領スル「既久シク」ノ西南
ノ海ニ臨ム處ニハ堅固ナル園ヲ置テ支那韃靼
及朝鮮ノ要害ニ備フ 按「園」ト云ハ即
松前ナル 千七百年間 大約我元祿十二
年ノ頃ニアタル 本ニ向フタル海岸ニ新ニ市街ヲ開テ兵糧武器
ノ備ヘヲナシテ其領防ノ要用ニ充ツコノ新街
モ亦其名ヲ「マトマイ」ト云フナリ此島ハ日本ヲ

シウ 奥ノ 封城内ノ一ナリ
予等爰ニ專一ニ記スベキモノハ「マトマイ」 前「ク
ナテ井ル」 「ク」ナ「ア」テ「ユ」ル「ベ」
「ロ」フ 及「ウル」 「ベ」 「ツ」 「ウ」 「ル」 諸地ノ
土人ヲ指シ日本ヨリコレヲ總稱シテ「エゾ」ト云
フ「ナリ」 「ク」 「ナ」 「ア」 「テ」 「ユ」 「ル」 「ベ」 「ロ」 「フ」 謬傳ヲ解クモノ
ニシテ宜ク地理學家ノ知ルベキコトナリ又往
古ヨリ「エゾ」ノ地ヲ論スルモノ多クメ或ハ日其
周圍三百里ナリト或ハ日日本ノ北方ニ在テ

レト其界ヲ相接スルモノナリト或ハ曰ク其地日本トハ海峽ヲ以テ相隔ツト諸説各一定ナラス又大韃靼トハ其地ノ鋭出尖稍ヲナシテ相迫ルノ処ニテ壞ヲ接スト或ハ曰コレ決ノ非ナリト其論説紛々トシテ定カラザリシカ一千六百四十三年日本寛永ニ^{十年癸未}ニ当テ和蘭ノ海船雅風ニ逢テ遂ニ其地ニ漂着セル時因ラスノ其分明ヲ得タリ^{按ニコレ本説ノカス}旦近世魯西亞人が

ムチマツトカレヨリ出帆シテ屢其南方ナル日本ノ海岸ニ至ルニ及テ今時ハ漸ク其各別ニ分レタルノ地ト云フ精説ヲ聞クニ至シリ且^カムチマツトカレ大韃靼及日本ノ間ニ在ルノ大地ヲエリト名クルトハ更ニオキナリ前ニ云フカ如ク或時日本人ノ語ニ^トマトマイ^前クナシ^ルシ^リエト^トル^ルア^ト及ウルツベツ^ルノ四島ニ住ム土人等ノ^トヲ^ヲ總稱シテ^トエ^トツ^ト云フトイフ^トヲ^ヲ聞テ後我

方始テ古今ノ大惑ヲ同キタリコレ元ト日本人
其土人等ヲ指シテイフコナルヲ其地名ナリト
誤リキケルヨリ近時ニ至ルモ「エヅ」トイフハ其
官ノ地名ナリトナシタルノ疑惑ヲ起シタルナ
リ其「ク」ナテ「ル」エテ「エル」「ル」及「ウル」「ル」ノ土人ハ日本
ニモ魯西亜ニモ從屬セス今時ニ至テモ尚自之
スルモノナリ而シテ其土人皆元トハ「クリレル
ム人ノ未裔ナリ彼等日本人ノ中「マトマ」
前 柘 人ト

鯨油 枯魚皮 革等ヲ以テ 砂糖 米 穀 鉄具ノ類ト交
易ヲナスナリ右ニ云フ「クリレルス」ノ「ハ」予既
ニ「齊」四卷魯西亜編中ニ載セタリ

○「クリレルス」諸島「ハ」カムチヤットカレノ南岸ヨリ其西
諸島「ハ」カムチヤットカレノ南岸ヨリ其西
「ハ」カムチヤットカレノ南岸ヨリ其西
四百十一葉ニ載セタリ

南日本ノ近傍マデニ一條ニ羅列シタル教寫ノ
名ナリ蓋シ其教總テ二十有五アリトイハレ未
タ其真教ヲ知ラス其「カムチヤットカレ」ニ相
近キ島

ハ魯西亜ニ屬ス然レ氏其遠ク相離レタルハ何
國ニモ從屬セスレテ各自立スルナリ坎崙々ニ
屢ニ大地震スルヲアリ又其嶋中ニ燃山アルア
リ諸其嶋ノ土人等ハ皆彼處ノ嶋ノ産ヲ以テ
坎處ノ嶋ノ品ト交易ヲナシテ生計スルナリ又
專ラ日本人ト交易ヲナスナリコノ日本ニ近キ
嶋ニハ一種ノ毒草ヲ生ス其根黄色ナルヲカ
フラニレニ似テ其大サハ大黃ニ等シ其北部ノ嶋

人等往テ是ヲ採リ以テ箭鏃ニ捺ルナリ 按ニ草
鳥頭ナ
リ「エトルベ」^{エト}及「ウルペ」^{ウル}嶋ノ人ハ其國中
ニ生スル「イラ」^{イラ}麻ヲ以テ一種ノ布ヲ製シコレヲ以
テ日本所製ノ絹布綿布及錢帛等ト交易ヲナス
其盛大ナル「マトマ」^{マトマ}嶋ハ坎諸嶋中ノ最南ニ在ル
モノニテ日本トハ一海峡ヲ以テ相隔ツルナリ
坎嶋 松前ノ帝國日本ニ屬シタルハ既ニ久シキ
以前ナリ「クナ」^{クナ}ニ「キル」^{キル}ノ土人ヲ見タルヲハ近

年「カ」チヤツトカレヨリ航海ヲ始メテヨリナリ日
本人ハ「ク」ナテ「ル」エトルベ「ウ」ルツペ「マ」トマレノ土
人ヲ總稱シテ「エ」リト云フ然ルニ古ヨリ地理学
家ニ於テハ日本ノ北東ニ當テ「エ」リト稱スル一
大國アルト云フノ説紛々タルヲ既ニ久シコレ
従来疑惑ノ未決ノ甚シキモノナリキ即右ニ云
フカ如ク四島ノ土人ヲ指シテ日本ヨリ「エ」リト
云フノ「確」説ヲ得テ始メテ往古ヨリノ大惑ヲ解

キ且其地方ヲモ評ニスルヲ得タリ

按ニ一二ノ誤解ハ論スルニ足ラス彼絶域歎
萬里ノ外ニシテ我北邊僻境ニ至ルマテ年来
意ヲ用テ尋索シ遂ニコノ書ニ至リテ眞面目
ヲ熟識スルヲ如斯惑スルモ尚餘アリ其遠ク
萬邦堪輿ノ学ニ意ヲ注クヲ西洋人ノ常態ナ
リトイハレ豈コレヲ識ル一朝一夕ノヲナラ
ンヤ故一編ニ因テ本編ノ諸雜説ヲ一掃メ全

ツリノ正當ヲ得タリコレヲ讀ムカキモ我
ニ在テハ何ソコレヲ忽諸スベケシヤ

附録

本編第一ヨリ第三卷ノ間件々我寛永二十年
和蘭船ノ鞆鞆地方訪尋ノ為メトノ便路野作^{エヅ}
地方ヲ航海セシ紀事アリ且其時我東奥南部
地ニ漂着セシニ其土人コレヲ捕ヘテ都下ニ
伴ヒ上聞セシトヲ載ヒタリコレ我記録ト符
合スルト也ニ辨セリ ^{頁由} 又項偶々西士「ハ」
レニテイシト云人ノ著述セシ東方諸国因誌

書中載スル処ノ日本記事ヲ読スルニ日本ノ
風土及彼輩我邦ニ渡来ノ由未ヲ載セ且
彼国人我邦在苗中ノ日記等ニ録セし臨
時非常ノ事ヲモ未録セし其中ニ和蘭船我南
部漂着ノ始未ヲモ詳ニ載セタルモノ有ルヲ
得タリ本編ノ諸雜記ト能ク合メ又却テ委曲
ヲ盡シ又我記録殘編ノ未夕審ナラサル所ヲ
了解スルニ是リ益ニ其実證積説ヲ考究セリ

因テ今亦コレヲ左ニ譯述シテ益ニ其證ヲ取
リ以テ本編ノ参考ニ充テ

○第九月九月十日我某和蘭船一艘ナムホ南ノ海

岸ニ漂着ス即チ其船至商客及八人ノ水夫ヲ捕
ヘシヲ「エード」ニ召レタリコレニ由テ在館ノ甲
必丹速ニ出府スベキトノ檄文江戸ヨリ長崎へ
到来ス按ニ多幸在苗ノ甲必丹ハ「ヨアニハ即チ
甲必丹命ヲ受テ奈途シテ都下ニ着府ス其問ニ

依テ其船爰ニ航海スルノ由未ヲ上京スルニ既
ニ彼捕ワレトナリタル者共ノ言上セシ所ト全
ク符合セリトナリ詳ニ後ノ第九號ニ説ケリ

○第九號「ナムボ」部南ヨリ「エーボ」部江ニ捕ヘ来
ル和蘭人十人ノ顛末

第九月^{我七}月十日和蘭船一艘ヲキヨ^{按ニ奥只ノ訛音ナリ}
領分ノ中「ナムボ」部南ニ着岸セシノ告訢アリコレ
ニヨツテ国人等驚キコレ若シクハ「カステイリマ

ー」^レノ法徒^{按ニ原文「カステイリヤー」ニトイフモ}
リス^テイヤーン^レトイフハ我^キリス^タニ^ト呼^ハル
ヲ受テ斯ヲ記セルナルベシ即契利斯督法徒ノ
義ナニハアラスマト大ニコレヲ怪ミ恐レテ国
中大ニ騒動セリトナリ其国主船中總人救ヲ捕
ヘテ「エーボ」部江ニ送ラントセリ然レモ彼等ハ曾
テ恐ルニ色ナリ却テ禮ヲ厚クシ其令ニ從ヒ船
主高客及八人ノ水夫等出テ、速ニ其囚シニ就
キタリ言語ハ互ニ通セストイヘモ餘ノ船中ノ

者モ皆国法ニ敬服シテ其令スル所ノ諸事ヲ謹
諾セリトナリ遂ニ右十人ヲ引テ「エド」ニ往ケ
リ曾テ「エド」ニ於テハ時幸ニ教化主按ニ還瑪ヲ
送り来リシ二人ノ譯士留在セリ其二人ノ者ニ
命セラレ右捕ヘタルモノヲ監視セシムルニ和
蘭人ナリ其時始テ彼国人コレヲ知リテ安氣セ
シトナリ按ニ舊記ニ曰寛永二十年癸未五月黒
田右衛門佐領外筑及マギウ嶋ハ半天
連「エド」ヨロイフカウロトイフ者漂着早速呂捕詮
議有之所切支丹勸メノ爲ニ渡リリロ旨及白

伏長等奉行山等權八郎ニ相渡リ夫ヨリ同年七
月十三日江戸着ニテ宗門奉行井上某ハ御預ケ
云云トアルモノト年曆合スレハ其時長嶋ヨリ
附添来リシ「ボル」トギス通事ナルヘシ再「田
邊茂啓」カ長嶋志ヲ按ニ其船上陸セシハ其年五
月十二日其地ハ筑前国梶目ノ大嶋トアリ長嶋
ハ差送り江府ハ可差越旨ニテ相添ラレタルハ
通詞西吉兵衛名村ハ左衛門目ノ明仲庵ト記セリ
コレニ由テ右ニ譯士ニ託セラレ再「命」ヲ下ス
迄ハ心ヲ注ク宜ク款待スベシトナリ而ルニ右
譯士等ノ通辨ニテ分明ニ解シ雅クコレニ因テ
按ニ西名村西氏ナルヘシ波別ニ和彙一譯士ヲ
尔杜瓦爾通詞ヲ兼ルヲ見エ別ニ和彙一譯士ヲ

召サレタリ 梅ニ是志築
孫兵衛ナリ 此者着府シテ後先ツ此
者ニ右和彙船彼地ヲ航海セシ所以ヲ知ルヤ否
マヲ問ヒ給ヒシニ其應答皆曾テ其捕ワレタル
和彙人ノ其状セシトコロト照合ヒリトナリ元
来甲必丹出府シテ其檢査有テ後ニ所置セラレ
、ノ議定ナリシニ已ニ右譯司ノ言上スルトコ
ロト其捕レノ和彙人上稟セルト悉ク符合セ
シ故ニ再ヒ着岸ノ本処ニ送戻シ速ニ歸船スベ

キノ赦免アリテ遂ニ彼着津ノ地ヲ出帆スルコ
ヲ得タリト追テ甲必丹着府セシ寸ハ彼已ニ開
帆ヒリ但其美船ノ一艘ハ北方遙ニ帆影見ベシ
トナリ

○右捕ヘタル者共彼ノ国法ニ因テ水利ノ拷問ヲ
受クベキトナルニ愈ニ和彙人ニ相違ナキ明白
ノコト露レテ速ニ許サレ且滞府中ハ官待ヲ得タ
リトナリ

○甲必丹已ニ着府シテ後速時ニ國王ノ目前ニ召
サレ諸國老寺社司理官ノ輩列位ニテ長壽鎮臺
モロムチク 某ヲ以テ其始未細密ニ查照シ給ヘリ即其問答
ヲ互ニ奉リ

○問曰 今ヲ去ルヲ大凡四箇月ニシテ

按ニ其時
十月カ

異國船ニ艘我邦近海ニ二三日モ漂ヒ乃其一艘
ハ「マスマイ」按ニ「マスマイ」ハ柘前ナラン然レモ
コレハ南部ノ誤ナルヘレ前文ト合
スニ着岸ス因テ其國王命令シテ其船主高答其

餘八人ヲ召捕ヘテ「エド」ニ送ルリ其ニ艘ノ船
北邊ヲ航海セル所以ヲ知ルマ否又コレハ何方
ヲ志シ往ニトスルノ船ナルニヤ

答曰 貴邦北邊ヲ航海セルノ所以予嘗テ知
ルトコロナリ即予バタアロマ 謁バタアロマ 太亞筋垂ヨリ出帆スル
ノ前自カラ北船ニ往テ監視セリ且其時我印
度所轄ノ「エ子ラール」総督在テ謁 予ニ語テ曰
日本ノ北ニ當テ鞆鞆ノ海濱ニ大邑カタマ按

コレ鞆靴中ニ在ル契丹ナ
リ詳ニ弄ニノ卷中ニ註ス ト云フ一州アリテ
其邊海ニ要港アリ其処ニ支那人多ク来リ聚
リ諸般ノ絹布及其他種ノ品物ヲ齎来テ專
ラ交易ヲナスト聞ケリコレニ因テ我邦亦余
海船二艘ヲ登レテ其処ヲ按檢セシメ其実ヲ
得テ後漸々我商船ヲ運漕シテ互市ヲナスベ
キカ又愈々到ルニ於テハコレニ利益ヲ得ヘ
キトアルカラテ所サシムトナリ

○問曰 何ツレノ時月右ノ船バクアビヤ改バクアビヤ太亞胥亞ヨリ出
帆シタルヤ

答曰 我二月三日即日本ノ十二月十四日ナ
リ

○問曰 汝其船中總人教名アリテ船中ニハ何
物ヲ積ミタルヤヲ知ルカ

答曰 予其人教及其裝載スル所ノモノ逐一
ニコレヲ知ラス然レモ其積ムトコロノ物ハ

タレヲ諸ニロズ都テ毎歲渡来ノ船中乗組ノ
中ニテモ唯船主及長官ノ者ノミハヨク知レ
ルナリ

○問曰 別船ニ居ルトコロノ首長ノ姓名ヲ知ル
ヤコレハ後レテ我近海ヲ通船シタリ

答曰 コレ亦ヨク知レル者ナリ即姓名ヲ「マ
ー」ルテン・ゲルリット・デ・フリイス・ト云フ予嘗テ
^{ホルモサ}臺灣ヨリ ^{バクアロヤ} 跋太亞所ニ帰ルノ時彼ト共ニ出

帆セシ海船中ノ船主ナリキ

○問曰 右船中ニ鞆韃地生産ノ者アリシト聞ク
亦汝既ニコレヲ知ルヤ且如何シテ鞆韃人和蘭
人ト交リ同船シ来ルヤ

答曰 コレ亦委シク知レリ汝者當時書記ノ
官ニシテ連セントスル所ノ譯司ヲ兼シメテ
来レリ元来汝者ハ我^{モスコボヤ} 没斯哥未亞ニ所置ノ高
館 ^{按ニ此商館ノ在ル地ハ「アルカンケル」ナリ}
評ニ魯西亞國誌交易篇中ニ見ヘタリ

在テ暫ク和蘭ノ商客ト同居セリ其商客彼者
ヲ和蘭国ニ伴ヒ歸リ「ドイツ」言語及筆算ノ藝
ヲ教習セシメ遂ニ我交易局ノ官船ニ同駕ノ
本國ヲ奈帆セリ其行即亦船中ノ書記職トナ
リ来タレルナリ

○ 問曰 汝等固ヨリ知レル如ク其和蘭人ニ於テ
ハ我國嘗テ未船交易ヲ許シタリ然ルニ本船彼
地ニ於テ更ニ夜宿スルコトナク夜陰ニ至レハ近

ク陸地ニ寄セ晝ハ遠ク陸地ヲ退ケリトイフ且
屢ニ銃炮ヲ放テリトコレ頗ル惡念アル者ニ似
タリ汝其由ヲ知ルヤ

答曰 如何ナル所以ナルヤ予未タコレヲ辨
セス私ニ考フルニ彼等必ス薪水ノ料ニ竭キ
タルナラン然レモ我國ノ海船入洋ノ免許ア
ルハ唯長寄ノミニ限り他ノ港ニ着船スルコ
トハ許サレズト固ク守リ敢テ破宥上陸セスノ

空ク其近海ニ漂ヒ在リシニアラスマ又其屢
ス銃炮ヲ打放セシハコレヲ聞テ其国人ノ来
リ探ニ^トヲ待テ人至ラハ其国法ヲ聞キ其令
ニ後テ何レノ処ナリト看船スル^トヲ得テ以
テ其困スル所ノ事状ヲ告ケ其窮ヲ救ヒタマ
ワラン^トヲ希フンガ為ナランカ埃等ハ即我
^{エロロバ}改多巴列ハ固ヨリ其他列ニ於ケルモ不知辨
内ノ処ニ至テハ每子ニ航海者ノナストコロ

ナリ都テ海船陸地ノ近海ニ於テ斯クノ如ク
爲ス寸ハ必ス其国中ノ人小舟ニ乗シ白旗ヲ
建テ本船ニ来ルナリ即此白旗ヲ建テルハ和
親シテ敵對スルニハアラスト云ノ記號トス
ル我地方ノ定例ナリ

○問曰 我國中羅瑪契利斯督宗法教化至ノ来ル
^{ローマキリスト}
^トハ嘗テ嚴禁スルトコロナリ石船若シクハ埃
等ノ徒ヲ載ヒ来リシモノニハアラスマヤ

答曰 コレ今我国人羨ニ在テ其質トナルハ
即其徒ニアラズトイフノ一證タリ加之免許
アリテ年々来ス所ノ救船舟子及諸貨物ニ至
ルマテモ亦其貨物ニアラズヤ

按ニ石前書卷端并ニ問答十六條我記録ト
合スルヤ否コレヲ知ラス正史ニ就テ正サ
バ必分明ナルヘシ

附

本編成テ後其初冬偶々田邊茂啓カ編輯セ
ル長崎志トイフ書ヲ見ルヲ得タリ其序
八卷阿蘭陀未歴之部中

南部ヨリ阿蘭陀人被差送事

寛永二十癸未年阿蘭陀船一艘奥久南部浦ニ漂
流シ小舟二十三人乗り陸地ニ水取りニ揚リ夕
ルヲ具地ノ役人搦捕之江府ニ被差送処御扶持

等被相与御馳走ヲ加ヘラレ差置ル則其年行禮
ノ甲必丹ヲ被召呼通詞志築孫兵衛通辨ニテ被
遂御詮議必彼阿蘭陀船咬啣吧ヨリ乗出シ洋中
ニテ逆風ニ逢キ無是非南部浦邊ニ漂流セシ由
其譯分明ナル故甲必丹ニ相渡サル但奴節諸大
名家ニ御奉書被成下之

当年異国船云云前ニ録スル所ト同シ及ニ略
ス

奴節甲必丹申上ル八年未貴国ヲ頼奉リ渡海仕
ルノ必彼者迄御憐愍ヲ蒙リ難有仕合ノ趣帰国
ノ上赫業刺兒ニ申聞彼方ヨリ以使者御禮可申
上旨右拾三人ノ内カウクマン・ビルベル火矢打
エリマン外科カスパルヤンス按ニ世ニカスバ
ル流カスバル傳
トイフ外科アリニ保ノ頃来リシ上エナリノツケ
リトイハ傳ヘシハ即コレト見ヘタリ
ルテ五人ノ者ハ當方ノ者ニ替古可被為致由ニ
テ江戸表ニ滞届被仰付按ニ何方ニサレ置カレ
シヤ誰等其方術ヲ傳

へし
未^ハ閉^マ 残り八人ノ者長寄ニ連^レ帰^ル 予九卷ヲ按^ニコレ^レ 正保
元年甲申^ナ 申^ナナリ

貞由^ハコノ記ヲ見テ亦^ハバ^レレニテイニ^レノ書中
ヲ考索シ即其禮謝ノタメトシテ和蘭ノ使者
未朝セシ始末ノ紀事ヲ得タリ亦即^チコレヲ
左ニ附譯ス

○使節^ハ「^ハニテイリイス・ワリシウス」日本ノ都府
ニ到リシ始末

嘗テ日本「^ハムホ」部^南ニ漂着セシ我國人十人ノ者
彼地ニ囚ワレシカ後都下ニ召シ其事由ヲ検査
シ明白ヲ得テ国王コレヲ許シ給^ヒ歎待^テ淺カラ
ガリシ其感謝ノ使節トシテ「^ハイトル、ブロク・ホ
ヒウス」君ヲシテ本国ヨリ差送レリ然ルニ其人
不幸ニシテ中途洋中ニ病死セリコレニ依テ
如例其屍ハ菜汁ヲ以テ殮メテ坂^ハ太^ア亞^ビ勝^ビ亞^ニ載
セ来ルコトニ於テ坂^ハ太^ア亞^ビ勝^ビ亞^ニノ總督其人ニ次

クノ官吏「ア」ニテイリイスフリシウスナル者ニ再
々使使者ノ彼ヲ命シタリ其使節九月十九日按
九月ハ彼ノ一千六百四十九年ノ彼九
月ニメ即我慶安二年己丑ノ秋ナリ 長崎ニ着
船ス在函ノ我國人ハ皆恭シク其使節及来船ノ
諸官屬ニ出テ迎フタリ然ルニ日本人ハ別ニコ
レ等ニ禮ヲ盡セルヲナク其取扱毎年来船ノ甲
必丹ト異ナルヲナシ尤使節ハ固ヨリ其副使諸
官屬等ハ皆帶劔シテ上陸セント請ヒレニコレ

亦免許ナクメ特^タ使節ノミニコレヲ免セリ着船
レテ後云云ノヲ甲報セシニ日本人先始メニ
病死セシ其本使「ビ」イトルブツタホヒウス「ト」即
今来船ノ使節ノ官爵ヲ問フ因テコレニ答フル
ニ其己ニ死シタル本使ハ本職医官ナリ而シ氏
高名博識ノ名士タルヲ以テ自註ニ曰斯ノ如キ
商買ニ属スル者ヲ
以テコノ大任ニ命スルハトテ却テ日
本人ハ怪ミ大ニ鄙レムト見ヘタリ 本国ヨリ
コレニ其使節ヲ命シテ此度ノ大禮ヲ勤メシメ

ンカ為ニ送りレナリ今コレニ代テ来リレナリ
レウスレナル者ハ當時本國ニ於テ我國ノ政務ニ
与ルノ一官吏タリ坎者嘗テ二三年前迄ハ跋
太亞胘亞ニ在テ交易會館ノ密書記タリキ而ル
ニ坎度ハ本使ノ副使トナリ同船ニ出帆セリ時
ニ本使フロックホヒウスニ病死セシニ因テ我跋太
亞胘亞ノ總督其代使ヲ命シテ遣ワセシモノナ
リト

我使節駕シタル船中ニ交易ノ貨物ヲモ積ミ来
レリシカルヲ日本人ハ甚タコレヲ卑シシ耻ツ
ベキノコトナリトイヘルトノ風聞アリ

船中載セ来ル所ノ軍器ハ我定法ノ如ク本船中
ニ貯ヘ置シコトヲ乞ヒシニコレヲ許スコトヲ得セ
シメス但銃炮ノ鐵凡ノミ船中ニ置クヘレトナ
リ

都府ヨリ命令ノ下ラサル、間ハ日本人ノ中一

人モ我使節ト接語スルモノナシ
尤使節ノ居宅ノ戶外ニハ晝夜警固ノ監人二人ヲ置テコレヲ守ラシム

十一月十一日都府ヨリ使節甲必丹ト共ニ出府スベキノ命下レリト報ス
按ニ彼月日ナリ以下ノ十一月ハ我九十日ノ間ナルヘシ

コレニ依テ同月二十五日我同勢總テ二十四人共ニ長嵩ヲ祭途ス其中十六人ハ使節ノ從屬ハ

人ハ甲必丹「フロンク」ホルスト「ノ」後者ナリ

十二月三十一日「エド」ニ着シ定例ノ旅館ニ宿ス

但隨從ノ日本人ハ我輩和同ノ支障モアルベシトテ別居スベキノ命アリシトゾ

千六百五十年一月十八日
按ニ我慶安二年十一月ノ内ニアル

使節甲必丹ト共ニ一官府ノ券定ニ召サレ逆口来リシ波ホ爾社ル使節ノ言上セシコト、及契キ利リ斯ス督ト宗法ノ「」等查照ノ「」アリ同月二十日

亦其官府ニ召ノ尋問アリレハ嘗テ二箇年以前
使者^ゴンサルホ・テイ・レケラヲソトリ^{杜勉}ル^波使
者ノ一事後^ハナル者未津ス其者曰某年其日我船
^バ太^ア垂^ビ所^ス垂^マヨリ^カ瑪^カ港^ラニ^マ涉^カル時知^マ蘭ノ^マ夥^シ長^ク及^リ水
夫ヲ借^リリシ^トアリト又支那人モ其コトヲ以テ
上稟^セレ^ル由^ニ按^ニ支那人上稟^セレ^ルハ長^ク
ニ依^テテ国王大^ニ我^ノ印度ノ互市場^ヲ疑^ヒ憤^ル怒^リ言^フ
詰^ニ顯^レテ^テ嚴^ニコ^レラ^フ檢^査アリ然^レモ我徒ノ

申報其次^ノ分明ナルニ由テ一旦ノ怒リヲ止メ
テコレヲ^テ詩^シ給^ヒ尤^ニ以^テ后^ニ必^スコレヲ^テ慎^ムハ^ベキ
ノ諭告アリ
以時国王不例故ニ禮拜スル^トヲ得^ス謹^ニ按^ニ
ノ御時^ト見^ユ故^ニ彼ノ尊貴諸官モ日々ニ入朝有^テ其
病^ヲ奉^侍シ給^ヒレ^ル由^シナリ我同勢都^テ二十四
名其餘後^ノ辱^ノ日本人七十三人悉皆国王ヨリ懸
念アリテ其淹留中無益ノ雜費^ハ務^テコレヲ^テ厭

ワシムベシト我居停ノ主人ニ命令アリシトソ
三月二十一日閻老ヨリ我使節ニ令メ曰今汝未
テ朝謁拜禮ヲ請フ時ニ国王不豫帝ナラス故ニ
コレヲ謝シタマフトナリ使節コレニ答フルニ
我輩絶海萬里ヲ航ノコトニ来ル直ニ国王ノ尊
顔ヲ拜シ奉ンカ為ナリ然レモ不幸ニ其不豫
ノ時ニ遇ヒレハ已ムヲ得サル所ナリ遂ニ朝
見スルヲ得スメ其四月七日入朝メ閻老ニ拜

謁シ即チ嘗テ我国人ノ南部ニ漂着セシ十人ノ
者等長ク恩惠ヲ蒙リシヲ厚ク禮謝シテ承聞シ未
ル所ノ方物ヲ呈上セリ但尔右儲君ニ禮拜ス
同月八日再ニ宮中ニ召サレ国王ヨリ左ノ品ヲ
使節ニ賜ハル

銀 五百枚

阿蘭陀国王

銀 二百枚

衣服 十

使節

衣服 三十

甲必丹

但拜禮スル時ノ加リ一人毎トニ召出サレ
テコレヲ賜ハル

儲君ヨリノ拜賜

衣服 三十

使節へ

衣服 二十

甲必丹

全十一日貴官諸公ヨリモ拜受ノモノアリ全十
六日彼ノ南部漂着セシモノ等ノコ、ニ滞角セ
レコトプフンツナルレムベイレヘルト火術師ユ

リヤリン・シケーデル 外科「カスバル」レカムペル
ゲン水支隊長「ヤンス」ニツトヲ伴ヒ 自往ニ曰コレ
等既ニコ、ニ
滞府セシハ火術及其他藝術ヲ試ミシ 皆一同「エ
ノ」上覽ニ呈スヘキタヌナリトソ
ド「ヲ」登途ス其往返及滞角ノ日救總テ五箇月ト
二十有七日ニシテ再ヒ長寄ニ帰着ス尤我輩「エ
ト」ヲ登足スルノ時長寄ノ鑛臺ヨリ屬官二人ヲ
差添ヘラルコレ道中ニ於テ聊遲滞十カラシメ
ンカ為ナリ

在苗和蘭人五名比考

カウクススマン者

ヨーロッパマン・ウ井ルレム

ヒルペル者

ベイレヘルト

火矢打

火所師

ユリアン者

ユリヤン・シケイデ

カスパルヤンス者

カスハル・シカムペルケ

ノツケルラ者

水夫隊長
ヤン・スミット

按ニ長寄志記スル

所ハ傳聞ノ失語ト見ユ

此説譯載スル所ヲ以テ正名トスヘシ但一

名ヲ脱ノ四人トス 又長寄志ハ一名ヲ兩名

トス即「カウクスマン」ト「ヒルペル」トヲニツ

ニ分テルノ誤リナリ又コレ五人ト記メ一

名ヲ脱ス他目再考ヲ期ス「ノツケル」デハ前

ノ「カスパルヤンス」ノヤンスハ後ノ名ニ連

ヌヘリシテ「ヤンス」ミツトヲ誤リテ分々記セ

ルナルベシ

再ニ長崎志系八卷ヲ併セ考ルニ亦コノ和

蘭未使ノコアリ能クコレト符ス即チ反ニ

抄寫シテ参考ニ充ツ

慶安二己丑年赫業刺兒方ヨリ先年南部源流ノ
阿蘭陀人共御厚恩ヲ蒙リレ為御禮使者アリレエ
ハ着船ス其年冬為参府出達ノ甲必丹「ホロンコ
ス」同道ニテ江府表ニ参上レ翌正月御禮相勤ル
但先年ヲ甲必丹ハ奥国ニ渡リ其節ノ赫業刺兒
モ別人ニ代リ彼是及延引由去ル寛永二十年ヨ

リ當年迄八年ノ間江戸滞留ノ阿蘭陀人五人共
ニ此度長崎ニ連レ歸ル志築孫兵衛ハ通辨分明
ナリシ為御褒義三百俵十人扶持被下置処依願
於長崎通詞役彼仰付御扶持方ハ相離ル

同卷九卷

慶安三庚寅年正月甲必丹拜禮相勤但去正保元
年ヨリ江戸表ニ滞留ノ阿蘭陀人五人此度長崎
ニ連歸ル右ノ者外科執音古ノ為メ在留令シラ

55

ル

此年長寄奉行馬場三郎左衛門右衛門尉

右本文ニ略言スル所ノ波尔杜瓦尔使者云云

トイフ事亦「ハ」レンテイシノ書中其始末ノ

紀聞アルモノヲ得タリコレヲ讀ヌハ即其記

我実録ト符合ス我南蛮ト呼フモノハコレ亦

左ニ附譯シテ其略記ヲ明サントス即長寄志

所載ヲ後ニ抄寫シテ共ニ弁證ニ充ツ

○一千六百四十七年日本正保四年丁亥七月二十六日彼月日我

257

記録ニハ六月ホルトカ波尔杜瓦尔ノ船二艘国王ヨリ

ノ使者ヲ載ヒ来津セリ乃速ニ城コトヲ都府江戸

ニ告訢ス近隣ノ國主等各不日ニシテ救萬ノ軍

率ヲ従ヘテ長寄ニ馳ヒ来レリ波尔杜瓦尔ノ船

ハ始メ港外ニ在リシヲ務テ親誼ノ躰ヲ見ワシ

テコレヲ港中ニ引キ入レシム而後救多ノ小船

ヲ駛リ集メ燒打ノ用意ヲナシ且港内ニハ新ニ

浮梁ヲ造リ嚴重ニ港口ヲ防止セリ彼ノ波尔杜

258

瓦尔人等以觔ヲ窺見テ吾モ亦コレヲ防カント
テ竊ニ其用意ヲナシ船中ニ来ルトコロノ日本
人等モ一斉ニハ上船ヲ許サス三四人ヨリ餘ハ
コレヲ入レストナリ且コロノ船ハ高船ニハアラ
ス吾国玉ヨリノ使船ナレバトテ銃炮火菜等日
本ニ渡サ、リシトイフ其騒動ニ由テ市中ノ老
幼婦女子等ハ皆各其貯フルトコロノ廢物ヲ山
中ニ持テ退テ此乱ヲ逃シトノ用意ヲナセリ但

三

日本ヨリハ兩船共ニ許多ノ野菜等ヲ与ヘリ唯
コレニ芥子向ヒ出張セントスルヲハ先コレヲ
ト、メテ都府ヨリ命ノ来ルヲ待テタリ其船中
ノ人救一船毎ニ凡ソ二百人アリシトゾ

○ 依^ニ市中ノ人皆大ニ驚愕ノ思ヒヲナシ不日ニ
レテ波尔杜瓦尔人等ハ廢臺トナルベシト人毎ニ
怖シ嘆シテ云ヒアヘリ茲ニ「ハカタ^博多ノ君^{松平}」
筑前公^{ヲ云} 甚勇アリテ他軍ヲ待タズ唯其一午ノ專

三

勢ヲ以テ彼ノ波^{ポルトガ}ル杜瓦^ル船ヲ拵取ラント欲セ
リ其總勢先陣四萬人後陣モ亦二萬人ヲ備ヘリ
其猛威ノ甚シキヲ恰モ一世界ヲモ討取ラニ程
ノ勢ヒナリ然ルニ都府ヨリ一貴官王命ヲ奉シ
来ル所コレニ及バサレハ空シク退陣セリ即其
命ニ曰波^{ポルトガ}ル杜瓦^ル人ハ都テ我國制禁ノ者ナリ
押テ来ルニ依テ悉クコレヲ死罪ニ行フベキナ
リ然レモ杜瓦^{ポルトガ}ノ使者ハ近頃即位セシ新王ヨリ

遣スモノナレハ以後ノ如キハ堅ク許サストイ
ヘモ唯杜瓦^{ポルトガ}ノミ助命シテ帰シ与フルモノナリ
トナリ彼船中未タ出帆ノ用意ヲナサ、ルトイ
ヘモ九月四日速ニ港外ニ曳キ出サレタルトイ
フ

長崎志彙七卷抄録

南蠻船二艘入津之事

一正保四丁亥年六月廿四日南蠻船二艘入津セリ

即刻通詞ヲ以年未南蠻船渡海御前禁ノ処何ト
ヲ渡未止哉ト仰聞ラル蠻人共前々之通渡海御
免ノ御願ノ為ニ南蠻哥阿^{ゴア}国ヨリ使者船ヲ差越
スノ由申出ル同廿六日二艘ノ船湊内身^{ミナ}投^{ナゲ}岩ノ
前ニ入船セシム

一艘 長二拾八間 横七間 深サ八間

石火失二十四挺アリ外ヨリ見ヘタ
ル分

一艘 長二拾四間 横六間 深サ四間

石火失二十五挺アリ外ヨリ見ヘタ
ル分

二艘乗組人數合四百五六十人

使者名 コンサアルホウテシケイラデサ
ウル 是哥阿^{ゴア}国王ノ親類ナル由
一人名 トウルトデコスアホフレイ

右之趣委細江府ニ言上有之松平筑前守ハ同也

八日當表ニ著アリ、西国在城ノ大名各當表ニ祭
向アリ在府ノ諸家ヨリモ家老物頭等數多軍勢
兵船等ヲ揃ヘテ末着有之御奉行馬場氏諸家ノ
人々ニ向テ彼船其儘テ差置若江府ノ御下知無
之内不意ニ馳出ル者ナラハ無詮事ナルヘレト
種々評議アリ湊口ノ東西ニ女神男神ト云岩ア
リ、ノガミヲカミ 岩角ヨリ大綱ヲ引渡シ船數百艘ヲ並テ繫
キ合火ナル材木ヲ簀ノ如クシ人馬ノ通路モ可

成程ニ船橋ヲ掛渡湊口ノ海上東西三町四拾三
間陸路ノ如ク成タラハ彼蠻船容易リ馳出マシ
キトノ支度也則諸大名家陣所ヲ構ヘテ嚴重ニ
警固有之江府御下知ヲ相待シレ処七月廿八日
御奉書到未ニテ彼船為使者渡海殊ニ無異儀令
入船ニ付事靜可有仕置旨通詞ヲ以テ彼蠻船向
後共ニ日本渡海為嚴禁之趣被仰渡八月六日ニ
艘共ニ令帰帆ラル

同第八卷

正保四丁亥年六月南蠻船二艘當津ニ入船ス其
年加例冬中甲必丹ヘシテレキコエ夕江戸表ニ
参著之処年未御制禁ノ南蠻船當夏日本ニ渡来
ル事聞及ニ於テハ即判可令注進之処其儀無之
不届ノ至也トテ拜禮不相叶獻上物等御受用無
之長嵩ニ被令届之

一慶安元戊子年甲必丹テレキスノク渡来ル此年

上使井上筑後守当表着駕アリ新古両甲必丹ヲ
召シ去年南蠻渡海ヒレ事目明忠庵ヲ以稠レク
彼逐御穿鑿処阿蘭陀人曾テ不承及決テ存掛ケ
モ無之趣横文字ノ書付一通和解相添差上ルニ
付筑後守江府ニ持参有之此節迄ハ御禮御免無
之故両甲必丹共ニ長嵩ヨリ直ニ歸国ス

一右之通両年御禮不相勤之処筑後守甲必丹共御
院言ノ書付ヲ於江府御披露有之重船之事阿蘭

陀人方ニ決シテ不承及之段被為聞召分仍テ明
年ヨリ如例ノ御禮可相勤旨御免有之然ル處慶
安ニ巳丑年甲必丹ボロンコス渡海セリ猶又今
年赫業刺兒方ヨリ使者船フレインユス渡来ル
則江府拜禮御免ニ付其年冬中甲必丹使者ト同
道ニテ江戸表ニ参上シ翌年正月御禮相勤ル
此実記ニ因テ益々其證ヲ得タリ但彼ト是ト
精粗互ニ相交ル且シク参考メ其正證ヲ得ヘ

野作雜記譯說卷之五 附譯 終



